

第8章 焼きモノ

著者	佐藤 寛
権利	Copyrights 日本貿易振興機構（ジェトロ）アジア経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) http://www.ide.go.jp
シリーズタイトル	アジアを見る眼
シリーズ番号	100
雑誌名	イエメンものづくり：モノを通してみる文化と社会
ページ	169-198
発行年	2001
出版者	日本貿易振興会アジア経済研究所
URL	http://hdl.handle.net/2344/00017653

第 8 章

焚きモノ



薪を拾い集めて村に戻る女性。農作業の帰りである
うか。水と同様たぎぎ集めも女性の仕事である。
(ハジャラにて)

タバコ

イエメン人は、タバコ ドウツハーン 好きである。これは、途上国に共通の現象なのだろうが、所得が低い人であるほど、嗜好品としてのタバコになけないお金を費やす傾向がみられる。行政機関の実務能力が低く、所得税などの直接税を徴収することが困難なイエメンにあつては、間接税源として国家財政にタバコの占める割合は小さくない。国産タバコは一箱二〇本入り一〇〇リヤル、日本円にして七〇〇八〇円程度（二〇〇〇年当時）で、都市のスーパーなどでは一〇箱のカートン アルーサ 単位で売っているが、雑貨屋 ドウツカーン では、庶民相手に一本単位のばら売りも行われている。

乗り合いタクシーのなかで知らぬどうしが会話を始めたり、カートの場で初対面するときなど「どうです、まあ一服」という感じでタバコを勧められることがあり、これが緊張解除のサインとして機能することが多い。最近では民間会社などで「禁煙」のサインのあるところも少しずつ増えているが、まだまだ「大人の男はタバコを吸うもの」という通念は根強い。

国産タバコは「タバコ・マッチ公社」が生産している。原料となるタバコの葉は輸入されているものが多いようだ。ティハマ地方を中心としてイエメンでもタバコは栽培されて

いるが、これは後述する水タバコ用に用いられることが多く、スークでは茶色く乾燥した大きな葉っぱが束になって売られている光景を目にする。ライセンス生産としてはイギリス銘柄の「ロスマン」がタイズに工場をもっており（一箱一〇リヤル）、ホデイダに工場のある「カマラン」とシエアを競っている。

ところで数種類ある国産タバコの命名には政治の色が濃くつきまといっており興味深い。旧北イエメンの代表銘柄「カマラン」はホデイダの沖合に浮かぶ紅海上の島の名である。かつてイギリスがアデンとその後背地を支配していた頃、ヨーロッパアジア航路の安全を維持する必要から、紅海・インド洋上の主要な島々もやはり支配下においていた。紅海の出口のバーク・



タバコとアブーワラド。イエメンの2大工業製品である。

アル・マンダブ海峡（このアラビア語は「嘆きの門」を意味する）の要衝ペリム島、アフリカの角の先にぼつんと置かれた「稀少動植物の宝库」ソコトラ島と並んで、珊瑚礁でできたようなこの島もやはりイギリスの守備隊が駐留していた。

このような経緯から一九六七年にイギリスがスエズ以東の植民地を放棄し、アデンを首都とする南イエメンが独立することになったとき、当然ながらこの島の主権は南イエメンに委譲された。しかし、そもそも南イエメンには紅海に面した領土がなくアデンがこの島を支配することは困難であった。また、もしもカマラン島をアデンが支配していたら、南北紛争時に北イエメン最大の港ホデイダはひとたまりもない。こうした判断からサナアの政府は南イエメン独立と同時にこの島を軍事占拠し、その支配の実効性を示すために国民の目に最もよく触れる媒体であるタバコに「カマラン」と命名したのである。カマランのパッケージは帆掛け船が描かれたしやれたデザインで、味は「セブンスター」のようだという人もいる。最近は「カマラン・ライト」も発売されている。

一方、南イエメンの主要銘柄は「ラドファーン」（一箱七〇リヤル・二〇〇〇年）である。これは一九六三年、最初の反英独立抗争の銃砲がとどろいた地名であり、この武装蜂起はイエメン近代史では「十月十四日革命」と呼ばれ、北イエメンの独立の契機となった一九

六二年の「九月二六日革命」とともに、統一イエメンの二大革命記念日として祝日になっている。

さて南北イエメン統一後、新発売されたタバコは「サバ」「ガムダン」「マールブ」である。サバは言わずとした「シバの女王」のシバ（アラビア語の発音はサバ）王国の名であるし、ガムダンはそのシバ王国の後継ヒムヤル王国時代にサナアにあったといわれる伝説の王宮の名である。いずれも、当時の南アラビアの有力王国の存在を呼び起こす名であり、統一イエメンのアイデンティティーを強化しようとする政府の意向が感じられる命名である。ただし、いずれも原料タバコ葉の品質が悪いのか、あまり人気はない。

紙巻きタバコ シガーラ の歴史はイエメンにおいては比較的新しい。もと水タバコ

もとカート・パーティーでタバコといえば、水パイプ マダーア で吸う葉タバコ シーシャ である。マダーアは通常短い三本足がついていて、その上に水を溜める球状の部分があり、そこから細い管が垂直に伸び、その先端に素焼きの火受け皿が載っている。この火受け皿の真ん中にはいくつか穴があいていて、その下に漏斗のような中空の首がついており、この部分をパイプの上に差し込むようになっている。この皿にまぜ赤くおこした炭を置き、その上に茶色く乾燥させたタバコの葉を適当な大きさに刻んで

載せる。水パイプの本体は真鍮製で、サナア旧市街のスークにこれを商う専門の一画があり、真鍮部分に細かい模様が彫り込まれているものもある。この部分から長いホース（ときに二〇メートルくらいのももある）が出ていて、その先端についた吸い口で回し喫みされるのである。マダーアは部屋の真ん中にでんと置かれ、ホースをリレーすることによって部屋中の人が順番にタバコを吸うことができる（一〇ハペーシの写真参照）。マダーアの上で燃やされたタバコの煙はパイプに吸い込まれて水溜めのなかの水の上を通過してホースに導かれ、長いホースを経由して喫



マダーア作り職人。ただし水溜めの部分はある程度できあがったものを買ってきて組み立てるようである。（サナア旧市街にて）

煙者の口まで届くのである。水パイプでタバコを吸うにはかなりの肺活量が必要で、そのとき水溜めの水が波立つ「ボコボコ」という音が、話題のときれたときなど部屋のなかに低く響く。紙巻きタバコに比べるとかなりきつい味で、水パイプにおける水は一種のフィルターの役割をしているのだろう。

マダーアのてっぺんに載せたタバコの葉に火がよく通るように、しばしば上から底をくりぬいた空き缶がかぶせられることがあるし、部屋のなかに香りを行きわたらせるために香が加えられることも多い。

水タバコは同じ一つの吸い口を共有することから、食事の「共食」以上に参加者の



タバコの葉売り。背中にあるのがタバコの葉、手前に積んであるのは粉タバコ トゥンパーフ である。(サナア旧市街にて)

信頼関係、一体感を醸成する効果があるのだが、それだけに伝染病、それも気管支系の結核などの蔓延の原因として批判されている。日本政府はイエメンの結核対策を一九八〇年代から支援してきたのだが、そのプロジェクトが作成した「保健教育」ポスターでも、水タバコは結核がうつるのでやめましょう、と指導している。こうした衛生教育が功を奏してか、若い年代になるほど、水タバコを吸わない人が増えている。どうしても吸いたければ「吸い口」の個人化という対策も可能である。女性の結婚披露パーティーでは狭い部屋で水パイプが回し喫みされることが多いようだが、そんなときに自分用の吸い口を持参して、ホースの先端に付け替えて吸う人が増えているらしい。肺への負担は同じだが、吸い口の共有による伝染は防げる。

さらに近年見られるようになったのは、マダーアの個人化である。カート・パーティーに集うとき、水タバコを吸いたい人は、自分専用のものを持つてくればいいのである。もちろん伝統的にマダーアは複数で回し喫みすることに意味があり、それゆえホースも蛇がとぐるを巻くように長かったのだが、最近ではホースが一メートル程度しかなく、水を入れる球状部分がシースルーのガラス製になっている輸入品（おそらくエジプトあたりから来るのだろう）が若い人の間で好まれている（六五ページの写真参照）。カイロでは一日の暑

さが峠を越えた日暮れ頃から、屋外のマクハ（コーヒー屋）でこの個人用水タバコを銘々に吸いながら、世間話に花を咲かせている光景がよく見られる。これに対して山間気候で冷涼なサナアでは屋外のマクハは流行らない。個人用水タバコもやはり室内のカート・パーティー用である。ティハマでは、ホースの代わりに竹の筒が吸い口になっている場合があり、ドイツの葉でできたロープで編んだイスに座って吸う。竹筒の場合は吸い口の位置が固定されてしまうので自動的に個人用ということになる。

ところで、最近水タバコ用のタバコ葉に「フレーパーつき」が登場している。これも輸入品だが、バナナとかリンゴとかバラの香りがついているようだ。全般的な禁煙運動と、女性への喫煙習慣の普及は一見矛盾する動きだが、共に世界的な流行であるらしく、フレーパーつきシーシャは女性を中心に人気が高いようである。

香 空気が乾燥していることも無関係ではないが、アラブには「ほのかな香り」というものに対する認識はほとんどないようだ。家を訪問して、歓迎の挨拶として「バ

ラ水」（バラの花の香りを閉じこめた水）を頭からシャンプーでもするように振りかけられたり、食事が済んで手を洗ったあとにスプレーで人工的なにおいを振りかけられると、まるで自分がゴキブリになったような気分になる。



結婚式のザッファのときに焚かれる香。香台の右に見えるのが香草「レイハーン」で、花婿の両側に置かれるこの草にも香を焚きしめている。(サナア旧市街にて)

さて、シバの女王で有名なシバ王国は古代南アラビア諸王国の一つで、アジアと地中海世界をつなぐ「香料の道」を支配して栄華を築いた。なかでも乳香（フランキンセンス）と没薬（ミウルラ）の独占販売による利益は大きかったが、地中海世界でキリスト教が確立し多神教的祭儀がすたれると、神の「よりしろ」としての香料は急速にその需要を失い、これを契機にシバ王国は衰退していく。おそ

らく、そのとき以来イエメンには「香り」の文化は失われてしまったのだらう。

現在イエメン各地のスークで売られている乳香のほとんどは、実はソマリア産で価格も安価であり、「金と等価」と言われた往事の面影はない。乳香は近年では香として用いられるよりもガムのように用いられることも多い。口に含んで噛んでいると、本来が松ヤニのような物なので粘度が増してくるのである。もっともガムより粘度が高いので虫歯の詰

め物が取れたりするので要注意である。

乳香に代わって現在最もよく用いられている香料は「ジャワ香」ブフル・ジャワイーで、一見すると茶色い石ころのようである。これはさまざまな香料をブレンドし、松ヤニのようなもので小石大に固めてあり、自家製もあつて地方により配合される香料が少しずつ異なるらしい。現在の用途は客を迎えるときに部屋に焚きしめるほか、床に置いた香台の上に鳥かごのようなものを置き、これに衣服をかぶせて香りを焚き込めたりする。カート・パーティーのはじめに持ち出されると、客はザンナの裾を広げて香台にまたがって香を身にまとう。

香を焚く香台だが、シバ王国時代の出土品にはブロンズ製の精巧なものもあるが、最近のものは、素焼きにペンキで彩色したティハマ製の大振りなものか、石鍋と同じ石材でつくられた小振りのものが一般的で、いずれにせよ細工の細かいものはない。これは香料の社会的な位置づけが低くなっていることと無関係ではあるまい。

ところで「ジャワ香」という名には、インド洋を股にかけたハドラマウト人の活躍のあとが偲ばれる。ジャワ島は言うまでもなくインドネシアの人口の大半が住む島で多くのハドラマミーの子孫たちも住んでいる。しかしエメンにおける ジャーウィー という言葉

は単にジャワ島だけを意味するのではなく、インドからインドシナを経てマレー世界に連なる一帯、今日でもハドラーミたちがその痕跡を残している「東の世界」を指す言葉のようである。これら地域からのさまざまな香木（紫檀、白檀、黒檀など）や香料を配合した香だから、ブフル・ジャーウィーなのである。ブフルはアラビア語で香料を意味する。

一方、インドネシア、マレーシアなどのマレー・イスラム世界では、植民地経験を経てローマ字を用いるようになる以前は、マレー語の標記にアラビア文字を用いていた。そして興味深いことに彼らはアラビア文字のことを「ジャーウィー」と呼ぶのである。するとアラビア語の「ジャーウィー」とマレー世界における「ジャーウィー」はほとんど反対の方向性を示すことになる。すなわちアラブにおける「ジャーウィー」は「東のほうから来たもの」を意味し、マレー世界においては「西のほうから来たもの」を意味する。私にとってこれは長らく謎であったが、最近ようやく謎が解けた。カイロのアズハル大学は、世界中のイスラム教徒の勉学の中心で、今日でもマレー世界からの多くの留学生を引きつけている。十九世紀にカイロのある本屋がこうした留学生を目当てに、アラビア文字を用いて彼らの言語の書物を発行していた。ウルドゥー語なども含まれていたが、それらの大半

はマレー語のものであったので、これらの書物は一括されて「ジャーウィー」と呼ばれた。こうした「ジャーウィー」書物を留学生が故郷に持ち帰った結果、アラビア文字で書かれたマレー語の書物が「ジャーウィー」と呼ばれるようになったのだらう。

深読みすれば、「アラブとアラブ以东の世界が融合したもの」が「ジャーウィー」である、と考えることもできる。「ジャワ香」にはアラビア産の香料の他にインド世界、マレー世界で産出されるさまざまな香木も含まれている。来客時にこの香を焚くのは、「多様なものの調和」を求めるから、というのは考えすぎだらうか。

タヌール パンを焼いたり、料理を煮炊きするかまどを タヌール という。これはインドの「タンドーリ・チキン」の「タンドーリ」と同語源であろう。少し大

きなスークに行けば、たいていスークのはずれのほうに大きな水瓶のような形状の素焼きのタヌールが並べて売られている。水瓶と違うのはかまどのくべ口の部分が切り取られている点である。このタヌールを土やセメントで固めて台所に据えつけるのである。タヌールの産地はティハマに多いが、北部山岳地でもサナアの北西、タウィーラのもの是有名である。

ホブズはタヌールで焼かれなければならない、このホブズ焼きは女のたしなみとして不可

欠なものである。ホブズが焼けないようでは嫁に行けないのである。サナアでは丸くこねたパン生地を、中にワラなどを詰めた丸ザブトンのような「パン押し」の球面部分に伸ばして、タヌールの壁面に張りつける。適当に膨れてきたところを素手で取り出すのである。かなり高温のタヌールに手をつ込むのだが慣れればやけどなどしないようである。残念ながら男の私にはこの作業にチャレンジする機会はめぐってこない。

家庭ではタヌールの火力は主として薪に依存している。そして水と同様薪の調達は女性の仕事である。日暮れ前の時間帯に山岳地を車で走ると、細い灌木の束を頭の上に載せて家路を急ぐ数人の女性の隊列を見ることがあ



タヌール売り。これを逆さにして周りを土で固める。
(ペイトル・ファキーフにて)

る。農作業の終わりに薪用の枝を拾い集めてきたのだらう。しかしイエメンの山にはそう木は多くないので、薪だけでは火力が足りず、これを補うために「糞ケーキ」ザムジ が利用される。これは家畜の糞（と人間の糞）にワラなどを加え乾燥させ、直径三〇センチくらい楕円形のケーキ状にしたもので農村の貴重な燃料源となる。雑食の人間の糞が混ざるとかなりの火力が得られるということである。農村では、天氣のいい昼下がりに家の壁や石垣にこの糞ケーキを張りつけて乾燥させている光景を目にすることができ、十分乾燥すれば、家の脇に重ねて積んでおいてもほとんど臭いは気にならない。



糞と草を混ぜ固めた燃料ケーキ。十分乾燥させてから用いる。(パニーマタルにて)



ガスタヌールでホブズを焼く。パン生地を右手に持った小さな座布団のようなものの上に薄く広げて左手で釜の蓋を開け、釜の内壁に張りつける。(マナ八にて)

これは新市街が成立する以前から続いている伝統あるスークのようである。一方、新市街にはこのようなスークもないので、さらに薪の入手は困難である。そこでホブズ焼きサイズスの鉄製の釜にガスバーナーをつくりつけた「ガスタヌール」が登場した。ちょっとかさばるが移動できるし、薪の心配も要らないので一九九〇年代にはそれなりに普及してきた。ただし味は「薪で焼いたパンとは比べものにならない」とのことである。

都市部では山や農地が手近にないので、いかにタヌール用の薪を入手するかが問題となる。今では新市街にすっかり取り囲まれてしまったサナアの旧市街では自力で薪を入手することは困難である。このため、サナア旧市街の端にある涸れ川 サイラ には、毎朝近郊の山岳地から燃料用の木を載せたピックアップトラックが集まって来て「たきぎスーク」が立っている。こ

レストランなどでは大量のホブズを短時間で焼くためにもともと素焼きのタヌールの下にガスバーナーが据えつけられており、焼き上がったホブズは先端がカギ状になっている長い鉄の棒で取り出される。こちらのほうはそれなりにおいしいと評価されている。したがってガスタヌールのホブズがおいしくないのは、熱源もさることながら、タヌールの内壁面が鉄板であることにも問題があるのだろう。

ガスボンベ ガスタヌールに限らず、都市での燃料源として「ブタガス」(ブタンガス/日本で言うプロパンガスとほぼ同じである)が近年急速に普及している。こ

のブタガスの普及は卓上コンロの普及と表裏一体をなしている。最近是中国製、東南アジア製も出回りはじめているが、一九七〇年代から八〇年代にかけてはやはり日本製の二口コンロが台所の近代化の象徴的な商品として広まったのである。外国人や金持ち用にはヨーロッパ製のオープンつき四つ口コンロ(上が四つ口で、下に前開きのオープンがついている)も、かなり売られている。都市ガスと違って、ボンベがあつてホースさえつなげばどんな場所でも火力を得られるので、ガス管の配管などのめんどうなことはしなくていい。

ボンベ本体の購入は比較的高価(二〇〇〇年当時二九〇〇リヤル)だが、一度買えばその「使用権」が継続するので、空ボンベを持っていけばどこでも中身の充填されたボンベを

「ガス代」(二〇〇〇年当時一本二〇リヤル程度)のみで買うことができる(八五年には三九リヤルであった)。ガスを使って調理をするのは女性だが、空いたボンベの買い換えは男の仕事であり、これがときには大仕事である。とくに八〇年代はガスがまだ国産されていなかったため、何か政治的な不安や経済的な問題(サウジアラビアとの国境紛争や為替レートの低下など)があると、たちまち町のボンベ屋の在庫がなくなり、空のボンベを提げた男たちが長蛇の列をつくったものである。

イエメンが産油国になったのは南北イエメンとも一九八〇年代末からであるが、ガスボンベの供給システムが整備されはじめたのはそれからさらに十年後である。現在(二〇〇〇年)主要都市の近郊には「ガスステーション」が増えつつあり、内陸部(シバの女王の宮殿跡のあるマールィブの郊外)のガス田からガスローリーで運ばれて来たガスが、ここで近隣から回収されてきた空のガスボンベに再充填される。ボンベはこのステーションから町なかの「ボンベ屋」へピックアップトラックで運ばれ、引き替えに空になったボンベを回収するのである。地方部ではこのピックアップトラックが直接村を回ってボンベを取り替えることも行われている。

町では男たちがこのボンベ屋に買い換えに行く。昼間男手がない家もあるが、女性が買

りのキツク力が必要となる。そもそも充填されたガスボンベの重さは約三〇キロであり、日本人の男では数メートルをえっちらおっちら運ぶことはできても、道具なしに長距離を運搬することはできないだろう。しかしイメンではときには、女の子が水と同様頭の上



工場から市内の「配給所」に運ばれたボンベは顧客が買いに来るか、手押し車 アラペーヤ で小売りされる。(サナア旧市街にて)

いに行くことにはもちろん社会的な抵抗がある。そうしたときに買い換えは子供の仕事となり、道路の上をボンベを蹴り転がして歩く子供を目にすることがある。しかしやってみればわかるが、ボンベはそうまつすぐは転がってくれない。それに行きは空だからよいが、帰りは満タンなのでかな

にボンベを載せて歩いている光景も目にする。首の強さは鍛えることができるのだ。

都市では「ボンベの出前サービス」もある。工事現場で用いるような手押し車 アラベ
ーヤ に四、五本のボンベを載せ、住宅地の路地を回るのである。黙って回るだけでは家
のなかにいる女性にわからないので、なんらかの合図がある。「ガス」と呼ばわつて歩い
てもよいのだが、どうも東南アジアと違ってイエメンでは「呼び声」というのは好まれな
いようである。そこで、このガス売りは、ホースとボンベの付け替え用に持参しているス
パナでボンベを叩いて歩く。「カンカンカンカン」と金属音がすれば、それはボンベ売
りが回ってきたという合図になるのである。日中男性が家にいなかったり、自動車を持っ
ていない家庭にとってはなかなか便利なサービスとして喜ばれている。

イエメンは「部族社会」の色彩が色濃い。アフリカにおける「部族」は、言語
のろし

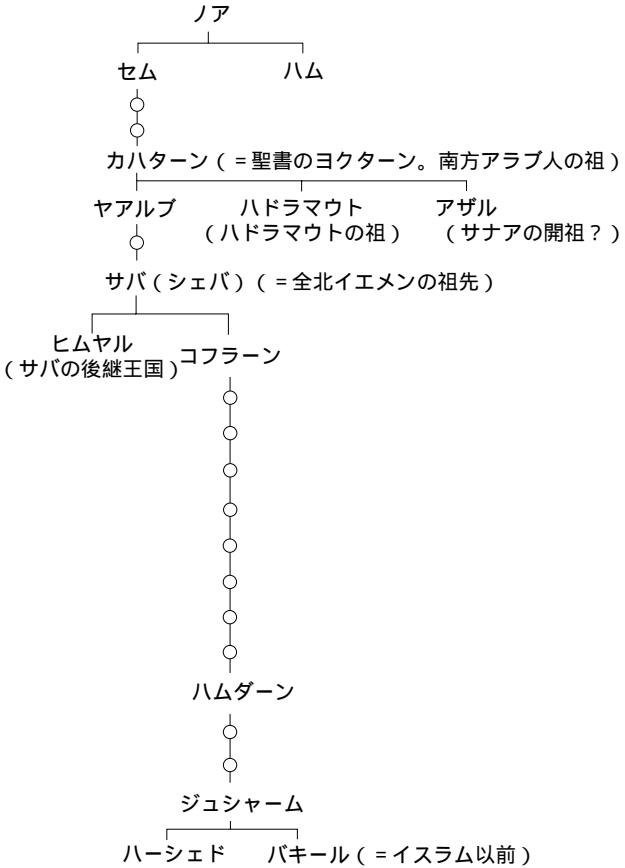
や宗教の異なる集団を指すが、イエメンにおいてはほとんどすべての人が人種
(アラブ)、宗教(イスラム)、言語(アラビア語)を共有するアラブ人であり、「部族」カ
ビーラ とはこのなかで先祖を共有すると考えられる血縁集団を指す言葉である。アラブ
世界は父系社会なのでこの場合の「先祖」とは父方の系譜である。とはいえイエメンでは
部族内、親戚内での結婚、とくに農村部では「父方のイトコ」どうしの結婚が理想とされ

ているので母方の系譜をたどっても三世代もすると同一の先祖にたどりつく可能性は高い。「部族」は、土地や家畜、水、農作物など稀少な資源をめぐるの戦闘時にはそのまま「戦闘部隊」の構成単位となる。そして少し広範囲な抗争になれば、先祖が近親関係にある友邦部族どうしが、結束して「中隊」を編成する。そしてより大規模な部族間抗争のときには「部族連合」が構成されその動員数は一万人を超えることもめずらしくない。こうなると立派な軍隊である。

イエメンには全土で六〇〇以上の部族があるといわれるが、『部族と地名の事典』に記載されている部族名はそれよりもはるかに多い。時代が下がるにつれて「分家」が増える可能性があるのだから、当然のことである。部族の枝分かれしたものを「肢族」ロボア というような呼び方をすることもあり、それをさらに「氏族」アーイラ に分けて考えることもできる。

ところでイエメン人に、最も大きな単位である「部族連合」(アラビア語では「大部族」という表現をする)はいくつあるのか、と尋ねると、「大きく分けて三つ」とする人が多い。それは「ハーシエド」「バキール」「マドハジ」である。前二者は北部山岳地を本拠としており、現在のイエメン政治を語るときには避けて通れない重要性をもっている。

部族の系譜



(出所) 『イエメン部族と地名の辞典』他より筆者作成。

アラブは系図を大切にすが、この系図を数百年さかのほれば「ハーシエド」と「バキール」は兄弟である。北部山岳地帯の部族はほとんどこのどちらかの部族連合に帰属するのだが、この二つの部族連合の仲はとも悪い。北部イエメンに二十世紀初頭から国王として君臨していたイスラム教ザイーデー派のイマーム（聖俗の最高権威）はハーシエド、バキールの両部族軍を、ティハマ地域、南部地域へ派遣し、支配地拡大のために利用していた。両部族のライバル関係は「イマームの両翼」と呼ばれた当時から、現代に至るまで続いているのである。

人口規模や帰属領域から言えばバキールのほうが大きいのだが、現在のイエメン共和国における存在感という点ではハーシエドが卓越している。一九七八年から北イエメンの大統領の座を占めているサレハ大統領はハーシエド部族の出身だし、七〇年代から断続的に「国会」議長を歴任しているシェイフ・アハマルはハーシエド部族連合の「部族連合長」シェイフ・マシャーフである。

さてサナアの南東には「サナハーン」部族と「ハウラーン」部族が隣接しており、しばしば部族間抗争が発生する。前者がハーシエド、後者がバキールに属し、どちらの人々も相当「筋金入り」の部族的倫理観をもっている。共にかなり広範囲の領域をもち、行政的

には内部にいくつかの集合村 ウズラ がある。ウズラは基本的に「肢族」の単位であり、それがさらにいくつかの集落 ガリヤ に分かれる。ガリヤの規模は戸数にして数十戸から百戸程度で、これらは基本的に「氏族」を構成する。例えば私の友人の一人は大統領と同じ「サナハーン」部族に帰属するが、「ターメシユ」村の出身で、大統領の「ベイト・ルース」村とは氏族が異なる。ただし一つの集落に住む人々がすべて近親者であるというわけではない。

ハウラーン部族は、さらに七つの肢族に分けられている。肢族間の抗争もときには発生しているようだが、七つのうち最も東（内陸砂漠部に近い）に住む「アルハダー」肢族は「血の気」が多く、一九九〇年代後半にしばしば外国人人質事件を起こしたものである。同じハウラーン出身のドライバー、アブダッラーはこうした行動に対して批判的で「アルハダーはハウラーンにとって厄介者 ムシケラ だ」と言っていた。

さて、複数の集落を巻き込むような抗争や、肢族内の問題が発生したときには、同じ肢族に属する近隣の集落や、同じ部族連合に属する近隣の友邦部族を召集して「部族会議」を開催することがある。ある日本人研究者によれば、電話や自動車道路が発達する以前はその地域の特定の山のとっぺんにのろしを焚き、周辺の部族民に会議の開催を知らせたの

だという。イエメン人は一般に遠目がきくし、ほとんど雨が降らず乾燥して空気が澄んでいるのだから、このろしは相当長距離の通信手段として活用されていたことは想像に難くない。

部族民 カビーリー は必ずジャンピーアを持っているが、同時にライフル

ライフル ブンドキヤ も必需品である。なかでもロシア製の「カラシニコフ」(AK・47)はその操作性の良さ、メンテナンスの容易さなどが受けてイエメン成人男子の標準装備と言つてよいほどである。これには中国製、イスラエル製のコピー商品も出回っている。もちろんライフルはもともとは戦闘用だが、近年ではそうむやみに発砲する機会もないので、腕前を試すのはもっぱら結婚式である。

村の結婚式では木曜日の昼食後、男たちが花婿を先頭に村のなかを練り歩いて村はずれの丘などに集まる。そして手に手にライフルを構えずらりと並び、向かい側の山や丘にしつらえられた標的に向けて射撃の腕を競い合うのである。もちろん、すべて実弾である。都市に近くて適当な場所がないところでは、ライフルを上に向けて実弾を次々と撃ち放つ。当然のことながら、結婚式での腕試しで手元が狂ってライフルの弾丸が人に当たる事故は後を絶たないし、外国人や国内の知識人からはこのような慣習は批判的である。イエ

メン政府も、本来このような「蛮行」を禁じてはいるのだが、取締りの手が届くのはせいぜい都市までで、農村部では放置状態である。町では花婿を仕立てた行進のとき、ライフルの代わりの景気づけとしてよく爆竹が炸裂する。これは子供の役割である。しかしカビリーはこれで満足するわけがない。私の訪れたある村では爆竹の代わりに手榴弾、ゴンボラ が登場していた。数人の少年がいくつかの手榴弾を腰にぶら提げ、信管をちぎっては道路脇の農閑期の畑に投げ、炸裂させる。「チュドーン」という音とともにサナア盆地の乾いた土が舞い上がる。現代の日本人なら手榴弾の土煙を間近に見ることは一生に一度もないかもしれない(というより、ライフル



結婚式の記念写真。花輪のついた頭布をかぶって金の剣を持っているのが花婿である。祝い客はザンナにマシャッタ、ジャンピーアとライフルが正装である。(サナハーンにて)



カピーリーの少年たちにとっては、ライフルを持つことが大人に近づくことである。男は闘うべきものであるからだ。(サナハーンにて)

を撃つこともないだろう)が、イエメンの少年にとって手榴弾もお祭りの綿飴のようなモノである。

そればかりではない。その村では軍用一二ミリ機銃掃射砲 ラッシャーア が人々が集まっている家の屋上に据えつけられ、時々思い出し たようにお腹に響く「ドドドドド」という音とともに火を噴いていた。角度はかなり上向いているので危害はないのだろうが、この弾の先に人がいないことを祈るばかりである。

実際、村のシェイフは一二ミリ砲を見て目を丸くした私に向かって「われわれは子供の頃から武器の扱いを訓練されていて、濫用はけつしてしないから安全である」と断言した。またカートの席で結婚式の誤射事故の話をする、た

いていの部族民　カピーリー　は「それは、最近武器を手に入れた南部の人々の村の話で、われわれカピーリーの村ではそんなことは起こらない」と誇らしげに反論する。たしかに部族領域の子供たちは大人の監視下で腕試しをする機会をふんだんに与えられているのは事実であるし、十四五歳ともなれば自分用の銃を持つようになることも珍しくない。それに村の外へのお出かけの際には腰にジャンベア、肩からカラシニコフが提がっていないと様にならない。

しかしいつたい、これらの武器はどこから手に入るのだろうか。ライフル、ピストルは少し離れたジハナナの「フリーマーケット」に行けば、よりどりみどりで手に入る。価格はそれほど高くはなく、公務員の給料の二、三カ月分で手に入る。フリーマーケット　スーク・ホツル　には政府の規制は及ばないので、それらの武器がどこから流れて来るのかは不問に付され（いずれにせよ、正規の輸入ではないこ



地方ではライフルの弾丸はガソリンスタンドや少し大きな村の電気屋等で電池と並んで売られている。日常的な消耗品なのだ。（ラダア近くにて）

とは確かである)、税金もかからない。これは規制緩和の極地であり、真の意味の自由経済とも言うべきだろう。そしてイエメン中どこへ行っても、ライフルの弾を売っている村のよるず屋 ドウツカーン やガソリンスタンド マハッタ があるものだ。

この日の結婚式のメイン会場となる広場には明らかに軍のものとなる発電機つきトラックが活躍していたので、大規模な武器は軍の高官からの「貸与」であった可能性はあるが、重火器もその気になれば購入できる。サウジとの国境近くサアダの町の郊外にある「スーク・テルフ」と呼ばれる木曜市は武器スークとして有名で、ここではバスーカ砲を手始めにさまざまな重火器が手に入り、地对



結婚式のジャンピーア・ダンス。花嫁側の男たちも加わって、踊りは最高潮である。小さな子供も見よう見まねで自分たちの部族のステップを覚える。(サナハーンにて)

空砲も入手可能らしい。サウジとの国境付近の部族のなかには戦車を保有している部族もあるのだ。

夜になって花嫁が花婿の家に行って来ると花嫁側の男たちと花婿側の男たちが向かい合つてジャンピーア・ダンスを踊る。その脇では空に向かって花火のように競い合つてライフルが次々に放たれる。撃ち出された瞬間は緑色の弾道が、上に行くに従つてオレンジ色に変わつていく、その色の変化もなかなか美しい。

大きな輪になつたジャンピーア・ダンスの全体を写真に撮ろうと屋上に上がつてみた。北東の方向に見える、ほの明るい一画がいまや百万人都市となつたサナアである。そしてその方向に向けられた一二ミリ砲からは、きれいなオレンジ色の弾道がつぎつぎと繰り出されていく。それは、部族民の「都市の灯り」あるいは「近代」に対する蔑みとあこがれの混ざり合つた気持を表しているように見えた。